分担研究「小児の障害につながる傷病に関する研究」の総括

大 国 真 彦

要約： 本研究班は本年度は2年目で，昨年度に決められた概要にそった研究がなされ，昭和63年度2月5日「昭和62年度第2回研究報告会」が行なわれた。

以下本年度の個々の研究報告について概略を述べる。

I．小児の不慮の事故に関する研究

I－1　大国は，子どもの不慮の事故予防について，危険回避のための物事の認知機能を事象関連電位を用い，客観的に評価することを試みた。

I－2　田中は，子どもの不慮の事故死の国際比較を行い，我国の子どもの事故死の特徴として，0～4才の溺水による死亡率が高いことを指摘した。

I－3　野田は，学校管理下で発生した学童の骨折損傷の分析を行い，男児に多く，骨折部位は上肢に7割弱と集中しており，転倒に伴う動作中であることが判明した。

I－4　岡本は，無認可保育所における死亡事故の実態について報告した。認可された保育所に比べて，有意に事故件数は多く，特に問題とされるのは0才時の窒息であった。

I－5　高野は，最近3年間の児童館における231件の事故の検討から，遊具による転倒事故で骨折の多いことを指摘した。

I－6　斉藤は，乳幼児の事故の分析から事故発生状況では，転倒，接触，転落が多く，家庭内の事故では安全点検と環境整備によって多くの事故は回避されたと報告している。

II．乳幼児期からの成人病予防に関する研究

II－1,2　大国は，小児の肥満を判定するのに，

日本大学医学部小児科

最近開発されてきた超音波皮脂厚計の有用性を検討し，肥満度やskin fold cariperと相関することを示した。また大国は，小児の高脂血症の推移について，昭和55年と同61年の6年間に，血清総コレステロールの高い者は高いランクで推移するというtracking を認めることを報告した。

Ⅱ－3　松田(博)は，肥満小児と脂肪肝について，肥満度が大きい程，脂肪肝の陽性率は高く，脂肪肝を有する者では血清脂質が高い。また高脂血症を有する高校生は，学童期に肥満歴のある割合の多いことを報告した。

Ⅱ－4　松田(一)は，肥満男児を対象に，小児期からＨＤＬの構造と機能について異常があるかどうかを，アポＡ－Ⅰ含有リポ蛋白とその亜分画の検討から，この小児期においては，コレステロール逆転送については特に障害がみられなかったと報告した。

Ⅱ－5　村田は，幼児期から学童期にかけての体格の変化を検討し，3才時に肥満度15％以上，セウプ指数18以上の者は，その後の肥満につながる可能性が高いこと，また肥満度とセウプ指数とはよく相関することを認めている。

Ⅱ－6　奥野は，二次性徴の発達と肥満度との関係について検討し，女子では，乳房が発達し，血清エストラジオールが上昇する9～12才で肥満度の増加が認められ，二次性徴の発現とともに肥満度が増加することが確認された。

Ⅱ－7　赤坂は，肥満傾向小児の摂食の仕方について検討し，対照児と比べて，食事が早く，柔らかい物を食べたがるというアンケート調査の結果を示した。

Ⅱ－8　高野は，肥満児教室における調査から，間食の有無による1日あたりのエネルギー比，脂肪エネルギー比の差について検討し報告した。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約：本研究班は本年度は 2 年目で,昨年度に決められた概要にそった研究がなされ,昭和 63 年度 2 月 5 日「昭和 62 年度第 2 回研究報告会」が行なわれた。
以下本年度の個々の研究報告について概略を述べる。